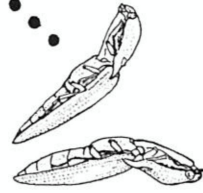


甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS



京都府冠島の甲虫

大石久志

1. はじめに

筆者は1989年7月30日より8月2日までの4日間にわたって、科学調査団の一員としてアリヅカムシの分布調査のため、冠島に入島する機会にめぐまれた。周知のとおり冠島は若狭湾西部の日本海に位置する無人の孤島で、小島ながら自然林にめぐまれ、昆虫相も豊富である。これに注目した丹 信実は、生物地理学および生物学的研究の恰好の場所として1928年の最初の渡島から、実に30年の長期間にわたってこの島を精査し、数々の分布上興味深い昆虫を記録した。また、いくつかの種はここを基産地として報告されている。

冠島は、古来より信仰の対象として保護され一石一木も持ち出せない。また現在オオミズナギドリの繁殖地として入島も厳しく制限されているために、環境は非常によく保全され、30年前、丹が詳細に記

録したのと、人工の物を除けば、全く変わってはず、足を踏み入れて少なからず感動を覚えた次第である。しかし、このため、以降の調査は少なく、報告もわずかである。そこで筆者は、土壌性甲虫の調査に限定せずに広く甲虫全般の採集を心がけ、ピーティング、スウィーピング、ライト・トラップ、ベイト・トラップと各種採集法を試みた結果、相当数の種を採集した。この中にはかなりの数の冠島未記録種が含まれている上に、分布上記録に値するものも若干見出されたので、以下報告する。

丹および塚本(1956, 1958)、これに笹川(1983)の追加した21種を加えて、冠島からは最終的に235種の甲虫が記録された。30年間、延べ90日以上の調査の結果ではあるが、丹の調査は地図作製のための測量に始まり、地質調査、そして化石種を含む植物および扁形動物から哺乳類までのリストの作製、さらにはオオミズナギドリの生態の研究に至



南端より見渡した冠島の全景(説田氏撮影)。

り、かかる膨大な作業の中での、この記録はまことに敬服に値するものと思う。これに対し、今回の筆者の採集品は未同定のものも含めるとおよそ110種、この内約半数近くが冠島未記録となる。これは、以後の30年間の採集器材および採集方法の向上によるものではあるが、とにかくも丹の偉業に対して若干とはいえ、新知見を加えることができたのは、筆者にとって大いに名譽とするところである。

なお、同定はすべて筆者が行い、とくに小形種もできうる限り同定する方針でのぞんだ結果、かなりの種を記録することができた。しかし、ムクゲキノコムシ科、コケムシ科、デオキノコムシ科、ハネカクシ科(シリホソハネカクシ亜科、ヒゲブトハネカクシ亜科)、ミジナムシ科、ハナノミ科、ゾウムシ科などの微小種は種名決定に至らず、本報告からは除外した。また同定は専門家の確認によって正確を期すべきであるが、今回は諸方より早急な報告を要請されたので断念せざるを得なかった。これらの追加・訂正はアリヅカムシに関する報告と共に次回に行いたい。また、時期的にも決して好期とはいえず、実質的にわずか3日間の筆者一人の採集によって、上記の様な成果を得たことから推測して、冠島にはなお未記録の種が多数生息しているものと思われ、継続的な調査が期待される所である。

なお、同定にあたっては大石美也子(オサムシ科)高桑正敏(カミキリムシ科)、水野弘造(全般)の各氏のご助言を頂いた。また塚本圭一先生には、今回の調査の立案・準備にご尽力頂き、種々ご指導賜った上、文献もお世話して頂いた。さらに同行の岩田修一、瓦林博司(日本地学会)の両氏には採集にご協力頂いた。また舞鶴市教育委員会の品田茂氏には本調査の準備過程から、大変ご尽力・ご助言を賜わり、特に記して深謝する次第である。

2. 冠島の概況

冠島は、名の知られた島ではあるが、実際に入島した者はごくわずかなので、まずは島の概況について記しておく。島は周囲わずか4km、面積20.8ヘクタールの小島だが、大半は山地となり、遠望すると奇観を呈し、いかにも信仰の島という印象を受ける。南部には若干の平地が存在し、この一部にはアシの繁る湿地帯があり、ここと周囲の海岸を除けば全島、うっそうとした原生林によって覆われている。なお、丹は植生の差異を主眼点として、これらを7つの生態系に区分している。すなわち①無毛区(海岸の不毛地帯)②海浜区(①に接している主として草本類の繁るところで、ほとんど数メートルのせまい幅で、島をとりまいている)③平地区(南方平地の大部分を占める森林地帯)④湿地区(平地区西北部、降雨後は沼沢となるアシの湿原)⑤山腹区⑥山嶺区⑦瘦地(北部の断崖ないし急傾斜地)である。

海岸は大小の礫によって覆われて、全く砂地をみない。ところでこの礫をよく観察すると、波浪の侵



無数の鳥の歩行によって表土が露出した林内の奇観(説田氏撮影)。

蝕を受けてやや不明瞭とはなっているが、巨大な柱状をしたものが多く混じって、それが本島を構成する岩石の主体をなす安山岩の柱状節理に由来することが理解できる。つづいて、海浜性の草本が生い繁るわずかな範囲の林縁を過ぎると、シイ・タブなどの巨木の繁る暖帯林の密林となり、2つの神社の祠を除けば全島、道も全くなく、舞鶴から(船でわずか30分程)この島を眺めるといささか興ざめるにしても、無人島の探検気分を満喫できる。

入島してまず驚いたのは、オオミズナギドリの高さで、推定20万羽といわれるこの鳥が平地の進入困難な個所を除き、全島の林中いたるところの土中に営巣しており、このため落葉はあたかも箒ではいたかのように掃除され、表土が露出し、鳥の歩行と糞のため固められて異様な光景を呈している。この海鳥はいうまでもなく日中、餌を求めて海上に出る上に、島内に他の鳥はほとんどみられず、島は完全にもぬけのからとなって昆虫の楽園が現出する。さて、鳥は夕刻に一斉に帰島し、夜中喧しく啼き通して、丹いうところの“鳥地獄”の様相となる。離島は未明に行なわれるが、滑空を要するため、大木に登るなどして飛翔し、これにより樹皮は完全に磨滅し亜金属光沢を帯びている。この鳥は全く人を恐れないうばかりか、まことにおおらかな鳥で、飛び立つとき筆者らのテントにつきつぎと激突し、はてはテントの上から飛び立とうと登り始める鳥さえいて睡



未明に離島するオオミズナギドリの群れ(瓦林氏撮影)。

眠を脅かされることはなほだしい。なお、蛇足ながら蚊(ヤマトヤブカなど4種が記録されている)が異常に多く、一層不快感をつのらせる。

以上の様に、小島ながら他では見ることでできない、非常に特殊な生態環境が現出していて、大変に興味をそそられ、丹がなぜあの様に執拗な調査を繰り返したのかも、実際現地に足を踏み入れて初めてうなずかれた。採集品のリストを見て頂ければ、この点充分に御理解頂けると思う。

以下、種名の確定した95種類について記録しておく。内、40種は冠島未記録で、これには*印を付しておいた。

3. 目 録

1. エグリゴミムシ *Eustra japonica* BATES
13頭, 31. vii. 1989 (以下同年); 9頭, 1. vii, 平地の森林中の落葉下より。(以下、落葉下と略記)。
2. チビミズギワゴミムシ *Polyderis microscopus* (BATES)*
10頭, 1. viii, 落葉下。
3. ウソビミズギワゴミムシ *Paratachys sericans* (BATES)*
1頭, 1. viii, 湿地のアシ群落下の落葉中より。(以下、湿地と略記)。
4. アトオビコミズギワゴミムシ *Macrotachys recurvicollis* (ANDREWES)*
1頭, 30. vii, 燈火。
5. キイロマルコムズギワゴミムシ *Elaphropus latissimus* (MOTSCHULSKY)*
1頭, 1. viii, 湿地。
6. クビナガゴモクムシ *Oxycentrus argutoroides* (BATES)
2頭, 31. vii, 落葉下。
7. ミドリマメゴモクムシ *Stenolophus difficilis* (HOPE)*
1頭, 31. vii, 燈火。
8. キベリゴモクムシ *Anoplogeniis cyanescens* (HOPE)*
2頭, 30. vii; 1頭, 31. vii, 燈火。
9. クロズホナシゴミムシ *Perigona nigriceps* (DEJEAN)*
1頭, 31. vii; 4頭, 1. viii, 落葉下および土化した朽木(1頭)。
10. アオアトキリゴミムシ *Calleida onoha* BATES
1頭, 30. vii, 燈火。
11. クロヘリアトキリゴミムシ *Parena nigrolineta nipponensis* HABU*
2頭, 30. vii; 1頭, 1. viii, 燈火。
12. カンムリセスジゲンゴロウ *Copelatus kamuriensis* TAMU et TSUKAMOTO
4頭, 1. viii, 湿地。湿潤なアシの落葉の深部にみられる。
13. セマルマグソガムシ *Magasternum gibbulum* MOTSCHULSKY*
2頭, 1. viii, 落葉下。
14. コウセンマルケシガムシ *Peratogonus reversus* SHARP*
6頭, 1. viii, 落葉下。
15. ホソケシガムシ *Oosternum sorex* (SHARP)*
5頭, 31. vii; 5頭, 1. viii, 落葉下。
16. アカケシガムシ *Cercyon olibrus* SHARP*
1頭, 31. vii, 燈火。
17. クロツブエンマムシ *Abraeus bonzicus* MARSEUL*
1頭, 1. viii, 落葉下。
18. コアカツブエンマムシ *Bacanius mikado* (LEWIS)*
1頭, 31. vii; 2頭, 1. viii, 落葉下。
19. アカツブエンマムシ *Bacanius niponicus* LEWIS*
3頭, 31. vii, 落葉下。
20. フジチビヒラタエンマムシ *Platylomalus fujisanus* (LEWIS)*
1頭, 1. viii, 落葉下。
21. キノコアカマルエンマムシ *Notodoma fungorum* LEWIS
2頭, 1. viii, キノコ。
22. エンマムシ *Merohister jekeli* (MARSEUL)
3頭, 31. vii; 1頭, 1. viii, 腐肉に多く、飛翔中のものも多数見られた。
23. オチバヒメタマキノコムシ *Colenis terena* HISAMATSU*
4頭, 1. viii, 落葉下。
24. コクロシデムシ *Ptomascopus morio* KRAATZ
3頭, 31. vii, 腐肉に多い。
25. ルイスセスジハネカクシ *Anotylus lewisius* (SHARP)*
1頭, 31. vii, 落葉下。
26. スジツヤチビハネカクシ *Edophus carinicolis* BERNHAUER*
1頭, 31. vii, 土化した朽木。
27. アオバアリガタハネカクシ *Paederus fuscipes* (CURTIS)*
1頭, 30. vii, 燈火。
28. チビクビボソハネカクシ *Scopaeus virilis* SHARP*
9頭, 1. viii, 湿地。
29. コバナナガハネカクシ *Lathrobium pollens* SHARP*
3頭, 1. viii, 落葉下。
30. クロナガエハネカクシ *Ochtheophilum densipenne* (SHARP)*
6頭, 1. viii, 湿地。

以下次号に続く。(京都府東山区)

○2 月にコクロコガネを三浦半島で採集

1988 年 2 月 15 日午前 10 時頃、神奈川県三浦半島の大楠山を訪れた際、山頂から南南西方向へと伸びる尾根の標高約 210 m 地点において、ヤマザクラを主体とした雑木林中のハイキングコース上を歩行中のコクロコガネ *Holotrichia picea* WATERHOUSE 1♂ を発見した。写真撮影の準備をしているうちに道端に落ちていた枯れ枝の下に潜り込みはじめ (写真 1)、まもなく完全にその姿が隠れた (写真 2)。潜り込んでからもしばらくは枯れ枝が小さく動いていたが、やがて枯れ枝も動かなくなったので、その枯れ枝を取り去った。本個体は枝下に静止していたが、ちょうど細い枯れ枝の分岐部に突き当たっており、あたかも行く手を阻まれたかのように見えた (写真 3)。

この年の冬は例年になく暖かな日が続き、当日す



枯れ枝の下に潜り込もうとするコクロコガネ



コクロコガネが潜り込んだ枯れ枝を示す



枯れ枝を取り去ったところのコクロコガネ

でに日溜りにはタチツボスミレやヒメオドリコソウなどが花を開いていた。

本種が三浦半島付近において例年いつ頃から出現するのかはっきりしないが、大場他 (1981, 横須賀市博物館研究報告 (自然科学) (28): 37) の記録では 5 月 14 日が最も早い。また野村 (1963, 原色昆虫大図鑑, 2: 128) によれば 4 月下旬から 8 月中旬に出現するという。いずれにしても、いくら暖冬とはいえ、2 月における出現はちょっと信じがたいことではないかと思われる。

なお、本種の同定は永井信二氏にお願いした。永井氏にお礼申し上げたい。

(神奈川県立博物館, 高桑正敏)

○南方系のゲンゴロウ 2 種、北限の記録

ゲンゴロウ類の分布については、まだ調査が進んでいないので、わからないことが多い。意外なものが意外な場所で採れることがある。筆者はつぎのような記録をもっているので分布資料のひとつとして報告する。

1) ムツボシツヤコツブゲンゴロウ

Canthydrus politus (SHARP)

Genus *Canthydrus* は南方系の属であり、東南アジアからインドにかけて広く分布している。日本には 2 種を産し、そのひとつ *C. nitidulus* は琉球に分布しており個体数も多い。また、本州、四国、九州には *C. politus* がおり、これも局地的ではあるが個体数が多い。この *C. politus* の日本での北限記録は筆者の知る限り静岡県の桶ヶ谷沼であるが、1987 年に福島県で発見されたので北限の記録として報告する。

1 頭、福島県いわき市常磐湯本, 19. x. 1987, 筆者採集。

採集地は雑木林の丘陵に囲まれた休耕地である。

2) コマルケシゲンゴロウ

Hydrovatus subtilis SHARP

Genus *Hydrovatus* も南方系の属で東南アジアを中心に広く分布しており、どの種も個体数はきわめて多い。*H. subtilis* の分布域は本州、四国、九州から東南アジアを経てインドに及ぶ。本州では静岡県桶ヶ谷沼で多数の個体を採集できるが、筆者は福島県で、1 頭のみではあるが、採集できたので報告しておく。北限の記録である。

1 頭、福島県いわき市藤間沼, 16. iv. 1989, 筆者採集。

この沼は常磐線平駅の東方にあり、海からの距離は 50 m くらい。松林に囲まれた公園になっている。岸にはアシなどが生えている、かなり大きな沼である。現在までにマルチビゲンゴロウやシマケシゲンゴロウをはじめとして 15 種ほどのゲンゴロウ類が発見されており、個体数も多い。

(東京都大田区, 阿部光典)

スギを食べていたクワガタ 3 種

藤田 宏・高桑 正敏

クワガタムシ科の幼虫は、通常は各種広葉樹の朽ち木を食べるものと思われていたが、最近になって、ツヤハダ (オオシラビソ)、オガサワラチビ (リュウキュウマツ)、ダイトウマメ (モクマオウ)、マダラ (クロマツ)、ミヤマ (アカマツ)、ヤクシマオニ (ヤクスギ)、ヤエヤママルバネ (リュウキュウマツ)、ハチジョウノコギリ (スギ)、オガサワラネブト (リュウキュウマツ)、ネプト (マツ類)、ダイトウヒラタ (モクマオウ) など、かなりの日本産類で針葉樹の朽ち木を食べていた例が相次いで確認されている。どうやらクワガタの幼虫にとっては、木の種類よりも、朽ちた状態の方が生育に重要らしく、たとえ針葉樹であってもその種類の好む状態に朽ちてさえいれば、♀の産卵や幼虫の成育にまったくさしつかえがないようである。

筆者らは神奈川県丹沢山において、ツヤハダクワガタ (中部亜種) *Ceruchus lignarius monticola* NAKANE, マダラクワガタ *Aesalus asiaticus* LEWIS, オニクワガタ *Prismognathus angularis* WATERHOUSE の 3 種が、針葉樹のスギを食べていた例を確

認したので報告しておきたい。

この 3 種が採集されたのは、丹沢山の標高 950 m 付近にあるヒノキとスギの植林地内にあった直径 70~80 cm、長さ 6~7 m ほどの倒木で、1988 年 1 月 31 日に、川崎良洋・小倉直樹の両氏と筆者の 1 人・藤田が崩して、ツヤハダの成虫 40~50 頭と幼虫多数、マダラの成虫 20~30 頭と幼虫多数、オニの幼虫多数を掘り出した。樹皮のなくなった倒木であったため、この日は何の倒木かわからなかったが、70~80 cm の太い部分の表面近くにはツヤハダとオニの幼虫が非常に多数見られ、やや内側のかなり固い部分 (ピッケルで渾身の力をこめてやっと削れるほどの固い部分) には、蛹室に入って越冬中のツヤハダ新成虫が多く見られた。また、この倒木の先端部にある直径 10~15 cm の枝の部分からは、マダラの成虫と幼虫が多数得られた。

1989 年 11 月 7 日、藤田・高桑両名と秋山秀雄氏で再び同地を訪れた折、前回に崩した上記の倒木を改めて調べたところ、すぐ横にあったこの倒木の切り株から、この木がスギであることがわかった (根元の直径が 1 m 近くあり、天然のスギと思われる)。さらに注意してみると、この植林地の中の立ち枯れや倒木で、ツヤハダやマダラが見出された数本の朽ち木はすべてスギであった。

これら 3 種が針葉樹を食べた例は、ツヤハダはオオシラビソを食べた 1 例 (中林, 1987)¹⁾、マダラはクロマツを食べた 1 例 (白石, 1987)²⁾、オニは近縁のヤクシマオニがヤクスギを食べた例 (奥田, 1989)³⁾ (ヤクシマオニは市川敏之氏もヤクスギより採集している) があるだけで、いずれの種もスギを食べていた例はまだないようである。クワガタムシ科の食性の幅の広さを示す一資料として記録しておく。

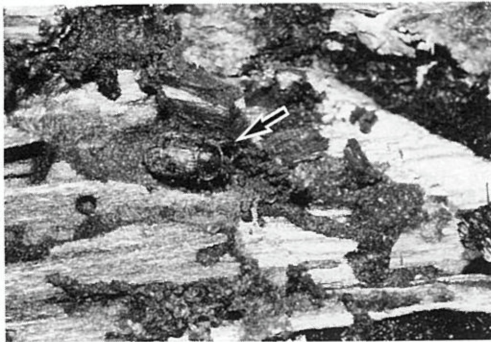
引用文献

- 1) 中林博之, 1987. オオシラビソの立ち枯れでツヤハダクワガタを採集, 月刊むし (197): 36-37.
- 2) 白石正人, 1987. 愛媛県今治市の海岸で採集されたマダラクワガタ, 月刊むし (197): 36.
- 3) 奥田則雄, 1989. 八丈島産クワガタ 2 種の生態, 月刊むし (226): 30-31.

(藤田, 東京都台東区; 高桑, 横浜市)

◇採集談話会予告◇

例年、好評を博している一泊採集会が今年は福島県南会津郡松枝岐村七入で行なわれる予定です。時期は 6 月下旬、宿は山小屋風民宿。料理もサービスも良い。宿の前を川が流れ、背後は原生林。御池小屋を経て小沢 (こぞう) 平あたりまでのブナ林、さらには村に入る前に通過する館岩村の貯木場など、オイシイ場所がいっぱい。家族参加も大歓迎です。



スギ朽ち木中の幼虫の食痕と蛹室内のマダラクワガタ新成虫 (矢印)



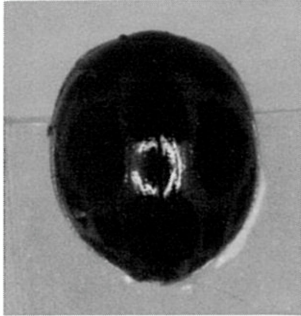
スギ立ち枯れから出てきたツヤハダクワガタ幼虫

○ニセクロホシテントウゴミムシダマシ, 九州に産す

ニセクロホシテントウゴミムシダマシ *Derispia japonicola* MIYATAKE は中條 (1985) によると本州・四国に分布し, 九州からの記録はないようである。

筆者の一人高橋は宮崎県東諸県郡において本種を採集したので, 九州からの記録として報告する。

2頭, 宮崎県東諸県郡綾町本庄川照葉大橋近辺, 21. viii. 1989, 高橋 寛採集 (写真)。



採集はカシ・シイ類の生い茂る薄暗い照葉樹林内の岩上の湿ったコケにおけるものであった。

参考文献: 中條道崇 (1985), (黒澤・久松・佐々治, 編) 原色日本甲虫図鑑 (III), 保育社, 大阪: 312. (宮崎県東諸県郡国富町, 高橋 寛; 日本大学農獣医学部, 岩田隆太郎)

○アシプトケシキスイを武尊山で採集

アシプトケシキスイ *Lordyrodus latipes* REITTER は甲虫図鑑 (III) によるときわめてまれな種のものである。筆者は下記のように複数の本種を採集したので報告する。

5頭, 群馬県利根郡片品村武尊山, 8. viii. 1989. ブナ立ち枯れに発生した菌類より採集した。この菌類は茶褐色をしていて本種の体色と非常ににており保護色となっていて非常に見つけにくかった。

参考文献: 原色日本甲虫図鑑 (III) (1985) 保育社. (東京都大田区, 和泉敦夫)

○カタボシエグリオオキノコムシの屋久島の記録
「原色日本甲虫図鑑 (III)」 (1985) によればカタボ

シエグリオオキノコムシ *Megalodacne bellula* LEWIS の分布地は北海道, 本州, 四国, 九州となっているが, 筆者は屋久島で採集された本種を所有しているので記録しておきたい。

1頭, 鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦, 13. vii. 1970, K. SUGA 採集

文末ではあるが, 標本を恵与いただいた益本仁雄氏に厚くお礼を申し上げる。

(東京都世田谷区, 沢田和宏)

○ケズネケシカミキリ, 兄島の記録

小笠原特産のケズネケシカミキリ *Phloeopsis lanata* (N. OHBAYASHI) はこれまで父島と母島から知られていたが, 兄島の標本を検したのでここに記録しておきたい。

1♀, 小笠原兄島, 24. x. 1989, 荻部治紀採集。

標本を恵与され, 発表を快諾された荻部治紀氏にお礼申し上げる。(神奈川県立博物館, 高桑正敏)

○奥尻島のキクイムシ

北海道西部に位置する奥尻島は昆虫の調査に訪れる人も少なく, そのためキクイムシ科の記録はトドマツオオキクイムシを除き皆無である。筆者らの1人鈴木は1989年7月6日より8月7日までの約1カ月間, 同島に昆虫誘引器を設置し, わずか9種ではあるがキクイムシを得たのでここに報告する。使用した昆虫誘引器は(株)サンケイ化学社製で白色のもの, 黄色のもの, 黒色のものを各1個, 白色誘引器の衝突板2枚のうち1枚を黄色としたものと黄色誘引器の衝突板1枚を白色としたものを各1個, 計5個を1本のひもにつらし, 設置した。誘引器に使用した誘引剤はマダラコール, アカネコール, エタノールで3種類まとめて取りつけた。設置地点は奥尻島北部の大岩生のブナ林である。

採集結果は下記の表に示した。時期が夏であったためキクイムシの種類, 個体数とも少なかったと思われる。今後はもっと早い時期に調査をすべきであろう。そしてキクイムシには黒色誘引器が有効と考えられる。

参考文献: 北海道自然保護協会 1988, 道立自然公園総合調査 (檜山道立自然公園) 報告書, 234pp.

(森林総研, 野淵 輝;

森林総研東北, 鈴木祥悟・榎原 寛)

	WY	Y	W	YW	B
アサヤマキクイムシ <i>Scolytus ellipticus</i> MURAYAMA		1	1	4	
クスノオオキクイムシ <i>Xyleborus mutilatus</i> BLANDFORD	6	4	3	9	11
サクラノホソキクイムシ <i>Xyleborus attenuatus</i> BLANDFORD	1	4	3	2	3
サクセスキクイムシ <i>Xyleborus saxeseni</i> (RATEBURG)			1		4
サクキクイムシ <i>Xylosandrus crassiusculus</i> (MOTSCHULSKY)				1	1
ハネミジカキクイムシ <i>Xylosandrus brevis</i> (EICHHOFF)	29	28	20	34	40
ハンノキキクイムシ <i>Xylosandrus germanus</i> (BLANDFORD)		1			1
ミカドキクイムシ <i>Scolytoplatypus mikado</i> BLANDFORD	1		1		2
ダイミョウキクイムシ <i>Scolytoplatypus daimio</i> BLANDFORD		1			

WY: 白色誘引器の衝突板1枚を黄色にしたもの, Y: 黄色誘引器, W: 白色誘引器, YW: 黄色誘引器の衝突板1枚を白色にしたもの, B: 黒色誘引器

○ブナ生幹へのルイスナカボソタマムシの産卵例

ルイスナカボソタマムシ *Coraeus rusticanus* LEWIS は一般にヤマハンノキやミヤマハンノキ、オオバヤシブシなどカバノキ科の樹種に集まることが知られている(黒沢, 1970, 甲虫ニュース, (11): 2 など)が, 筆者はブナ(ブナ科)に産卵中の本種を目撃しているので報告しておきたい。

1988年8月9日, 群馬県利根郡水上町湯ノ小屋林道の武尊山登山口のキャンプ場(間伐されたブナ林)において, 胸高直径50 cm以上のブナ3-4本の生幹上に本種数個体を認めた。これらは地上より1.5-3 m位の高さを這い回っていたが, うち2頭は立ち止まって樹皮の裂け目に腹端を入れ, 産卵姿勢を取った(写真)。本種がブナにも依存していることは確かかと思われる。



ルイスナカボソタマムシのブナへの産卵

また蛇足ながら, 同所にはブナの新しい伐倒木や切株が散在し, 各種カミキリをはじめとした甲虫が飛来していたにもかかわらず, ここでは本種の姿をまったく認めることができなかった。

なお, 本種がブナの生幹もしくは衰弱木に集まるという習性は, すでに黒沢(1976, 甲虫ニュース, (36): 5)や大桃(1988, りぼし, (12): 5)などに書き留められ, しかも黒沢(前出)はブナも有害植物として利用している可能性を指摘しているが, 産卵行動はこれまで確認されていなかったようである。

末尾ながら, いろいろとご教示下さった黒沢良彦・大桃定洋両博士と小林信之氏に厚くお礼申し上げます。(神奈川県立博物館, 高桑正敏)

○横浜市緑区のアカマダラコガネの記録

〈田園都市線甲虫シリーズ その2〉

緑区荏田北3丁目, 通称赤田地区は, 横浜市緑区北部にあり, かつては, 寺家ふるさと村と並んで, 大規模な自然の残されている昆虫の楽園であった。そして, そこにはゼフィルス類, クリタマムシ, 30種を越えるカミキリムシの記録等がある。しかしながら, 1987~1988年にかけて大開発が行なわれ, 昆虫類が生息していた森は全く姿を消した。この付近としては珍しいモミの木や, 樹令が百年はこし

ていたと思われるケヤキや広葉樹の巨木だけは残して宅地化できなかったものであろうか?

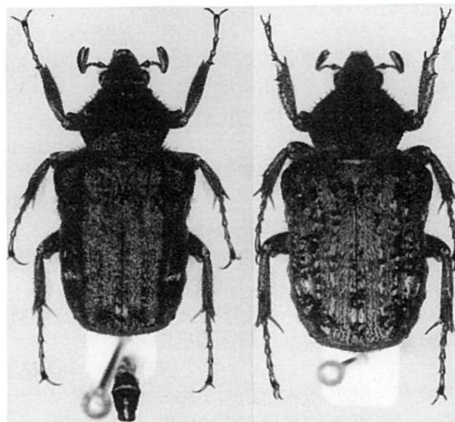
開発の始まる前年, 荏田北からあざみ野へぬける峠道のクヌギでアカマダラコガネ *Poecilophilides rusticola* (BURMEISTER) を採集しているのでここに報告し, 伐採された森林の冥福を祈りたい。1頭, 緑区荏田北3丁目, 31. viii. 1986, 大木 裕採集。

夜の9時頃, クヌギの樹液にきているところを採集した。このクヌギは今も存在しており, その後も再三再四採集に行っているが, その後アカマダラコガネは得ていない。田園都市線最後の記録となるかもしれない。なお, このクヌギの1 m わきまでは造成地となっており, その地価は, 推定, 坪あたり数百万円である。(横浜市緑区, 大木 裕)

○イブシホソハナムグリ採集例と生態的知見

イブシホソハナムグリ *Parapilinurgus masumotoi* は NOMURA (1976) により, 台湾中部の Nanshan-chi (南山溪) で得られた1♂に基づき記載されたが, その後は小林(1980)が解説している程度で, 記録の少ない種類である。

1989年の9月, 鳥飼兵治氏は本種を多数採集し, 知見の殆どなかった生態の一部を明らかにした。同氏の承諾を得て以下にその概要を報告する。



60♂♂36♀♀, Kukuang, Taichung, Taiwan, 18~28. ix. 1989; (写真左・♂, 写真右・♀)

台中県・谷関温泉の上流約7 Km (標高約900 m)の地点で採集。晴天時にアラカシの樹液に飛来した。時間は午前10時から午後2時位まで。また, バイントラップでも採れたという。

本種は, アリノスハナムグリ族 (*Cremastocheilini*, 和名仮称) に属し, このグループは後食などの報告が見当たらない。こうした意味から, 鳥飼氏の採集・観察例は貴重なものと思われる。

末筆ながら, 採集品の一部をご恵与下さり, 発表を許された鳥飼兵治氏に深謝する。

(東京都大田区, 酒井 香)

○アマミミズアトキリゴミムシ吐嚙剛列島に産す

アマミミズアトキリゴミムシ *Apristus miyakei* HABU は、基産地の奄美大島のほかでは知られていないと思う。最近、鹿児島県トカラ列島の中之島産の標本をみる事ができたので記録しておく。

1♂1♀, 鹿児島県十島村中之島池原, 29. vi. 1989, 斉田義典採集。

貴重な標本を恵与くださった東京農業大学の斉田義典氏に厚く御礼申し上げる。

(千葉県船橋市, 笠原須磨生)

◇新入会員◇

(1989年11月~1990年1月)

◇例会報告◇

1989年12月例会を17日(日)午後1:30より、上野・国立科学博物館4階実験講義室でおこないました。会務報告に続き講演は2題。

森本 桂氏(九大農): 日本産昆虫総目録出版と記載分類学の現状。



森本 桂氏

斉藤秀生氏(野生研): *Pidonia* 界の近況, 日本産昆虫総目録出版の裏話。

ほかに話題提供として、日本新記録のアオゴミムシ2種の基準標本(甲虫ニュース, Nos. 86; 87/88参照.)についてスライド投影(笠原)があり、標本回覧や懇談に時を過ごし、午後5:00散会しました。

次いで5:30より例年の会場鳥正に席を移して忘年会を開催。恒例の文献オークションが座を賑わし、和気あいあいのうち午後8:00散会しました。

末尾ながら、本例会に過分のご寄付を頂いた馬場金太郎先生、ならびにオークションにご協力くださった会員各位に厚く御礼申し上げます。参加者49名、忘年会出席者29名。(笠原)

日本鞘翅学会

会費(一ケ年)5000円, 次号は1990年6月下旬

発行予定

発行人 上野俊一

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(364)2311, 振替 東京8-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 東京(3)21129

電話 (03)409-6401(ムシは一番)

FAX (03)409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥6,200, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,870, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300, 4個以上 ¥850(以下同様), 第2地帯 ¥1,500, ¥950, 第3地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03)811-4547, 振替 6-113479